
私を彼女と呼ばないで

仲原 慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私を彼女と叫ばないで

【Nコード】

N4135M

【作者名】

仲原 慎

【あらすじ】

しがないアラサー高校教師の山本夕莉は、天使顔と称される人気教育実習生の榊光と酔った勢いで一夜を共にした。夜が明けて榊は彼女に「恋人になること」を要求してきて――。

一、タバコと余韻

やっちまった……。

重いまぶたをどうにか上げて目を覚ましたあたしは、ふと隣を見て頭を抱えた。

罪悪感が胸をよぎる。

いや、普通、この状態で目が覚めて「やっべ」と思うのは男のほうだと思うんだけど。

けだるい体を無理矢理起こし、服に手を伸ばす。

Tシャツとハーフパンツ姿で、手にタバコとライターだけ持ってベランダに出る。

早朝の、しんとした空気が頬を撫でた。

「どーっすっかな……」

つぶやいてみても良い案が思い浮かぶわけじゃなくて、くわえたタバコに火をつける。

ゆらゆら、白い煙が暁の空に昇っていくのをぼんやり眺めていたら、昨夜の余韻がひたりとあたしに迫ってきた。

よかったなあ……。

前の男と別れてから2年間ご無沙汰だ。

恋愛する気はさらさらないが、どうでもいい男のセフレになるのも嫌だ。そんなわがままを言っていたら適当な男が見つかるはずもなく、ズルズルと年を重ねて30手前になっていた。

そんなあたしに久しぶりの刺激は心地好くて、やたらせまった……気がする。

『ああっ……もう、だめですっ！』

とか、言われたような……。

やっぱりあたしが襲ったということになるよなあ……。

ベランダから窓越しにベッドの上を見る。

うつぶせで寝ている彼は、遊びで女とやる男には見えない。純真無垢ないきものをどろどろに汚したようで、ずん、と気が重くなる。

勤めている高校に教育実習生で入ってきたさかきひかる榊光。

あたしより5つも年下の男。

見目麗しく、教師はもとより生徒の間でも人気が高い美男子。あ、イケメンつつうのか最近は。

あたしなんかより数段綺麗な肌と、悩ましげに見える長いまつげ。形の良いくちびる。

宗教画の天使のようだ、とは同僚の談。それが言い過ぎでもなんでもなく真っ当な評価だっと思えるからすごい。

同僚たちや生徒たちのように色眼鏡で見ないあたしでも、彼は天使に見えるのだ。

その天使と一夜をともにしたあたしはさながら墮落に引きずりこ

んだ悪魔で、状況を理解するなりため息が尽きなかった。すつきりさっぱり水に流して、仕事に戻って……くれたら良いんだが。

くれるよね。

遊び慣れてるとは思わないけど、大人の男だもんね。

酔いにまかせてやっちゃった、なんてよくあることだよね。

大人なんだから、そこは線が引けるだろう。一夜限り。この先は二度とない。昨夜のことはなかったことに……。

ため息と一緒に白い煙を吐いて、タバコを消して台所に向かう。朝メシくらいは作ってやるかと思って。

せめてもの罪滅ぼしというか。

まるで部下に手を出したオッサンみたいな気持ちだ。もちろん不倫じゃない。

……。

ないよな？

浮気とかでもないよな？

いや、そこは念を押して確認したぞ、確か。

いくら酒に酔ってたってその辺の良識はある。襲っておきながら良識もへったくれもないかしらんが。

うん、大丈夫大丈夫。

彼がフリーだっつうのは学校でも知れてる話だ。

よしよし。ユウリ、おまえはちゃんと一線を守った。

……。

襲ってるけど。

「……おはようございます」

まったく起きる気配がない榊をそのまま寝かせて、自分ひとりで
コーヒー飲みながら新聞読んでたら、やや気落ちした声が聞こえて
きた。

「……おはよ」

他になにか言うことあるだろ、あたし！

「……えーと、ごはん食べる？」

って、

……そーじゃなくて。

榊は思いつめたような顔であたしを凝視する。
その目がすごく嫌な予感を招く。

まさか、マジだったとか言うなよ？
頭を抱えそうになる衝動を抑えて、あたしは榊に笑いかけた。

「まあ、気にすんな。今日は休みだし、ゆっくりしてりゃいいさ。
あたしはもう出かけるけど、好きなきときに帰ればいい。はい、鍵。
明日学校で返してくれたらいいから」

カエルのキーホルダーつけたスペアキーをテーブルの上に置くと、
榊はその場に正座した。

ジッと、あたしを見つめてくる。重苦しい沈黙に自分の笑顔が
引きつるのがわかる。

なんだこの緊張感。

いや同意の上だったじゃん。あたし今ホントにダメ上司の気分……。

「……なんで鍵……」

やっと口を開いた彼は視線を外さず、あたしは嫌な汗が背中をつ
たうのを感じた。

「ん？ いや、他意はないけど。あたし、今日買い物の予定あるし、
榊君だって予定があるでしょ？ 変な気遣わなくていいから、帰っ
ていいよ。まあ、昨夜のことは、お互い思い出ってことで——」

最後まで言えなかった。

榊の目から大粒の涙がボロボロこぼれてギョツとしたからだ。

大の男が泣いている！

普通の男なら「ふざけんなガキ。男だろ、泣くんじゃねえ」って

蹴りの一発でも入れてやるところなんだけど、天使顔の榊は別だ。
起きたときに感じた罪悪感がたちまちでかくなって、あたしは柄
にもなくうろたえる。

「ちょっ、榊」

「僕はっ！　僕は本当に、山本先生が――」

いやいや、言うな！　そこから先は言うな！

「待て待て、榊。考えてもご覧よ。君は教育実習生。あたしは指導
する担当。実習生ってことはまだ学生だ。半分教え子みたいなもん
じゃないか。それが男と女の関係になっちまうのはマズい。いや、
もうなってるけど。じゃなくて、マジ恋は勘弁してくれ。君だって
その顔でなにもあたしとこれ以上つきあうことないだろ？　良い女
は他にいるんだしさ。昨日のことはまあ大人の階段上る経験だと思
って過去のこと」

「嫌です！」

思いがけずきっぱりと拒否されてあたしは固まってしまった。

「山本先生とのことを思い出になんかできません。僕は、僕は、昨
日のことを学校に伝えます！」

なにいいい！

「……は、早まるな榊」

どうどうと、あたしは両手を上げ下げして、榊を落ち着かせるジ

エスチャーをした。

「動揺してんだな？ まさかあたしだと思わなくてな？ わかった。わかったから。あたしは学校辞めても構わんけど、榊はダメだ。実習生のうちから将来捨てるようなことしちや。つて、もうやつちゃったかもしれないが。いや、そういうことじゃなくて。やっと現場出て来れたんだ。ここで捨てるのは惜しいだろ？ あたしは別に昨日のことを蒸し返すようなことはしないし、だれにも言わない。それは約束する。だから、自爆するようなことはすんな」

あたしの言葉が届いているのかどうなのか、榊はあたしを見上げていた。

捨てられた子犬みたいな目で。

うう、胸が痛い……。

「……山本先生は、後悔されてるんですか」

へ？

後悔？

ああ、うう、まあ、後悔っつーか……。

『おまえが犯人だ！？』

つて突き付けられた指に縮こまって、

『おっしやる通りです』

と観念した気持ち。

わかるかな？ わっかんねえだろうなあ。

「相手が僕だったから、後悔されてるんですか」

鋭く問われた。

思いつめたような榊の表情にあたしはなにも言えなくなってしま
う。

榊の質問の意味はわかる。けど、別の意味ではまさにその通りだ
から、「違う」と即答できない。

違うんだ榊。別に嫌いな相手とやっちゃったってことじゃなくて
ね。その逆っつーか。

「そうなんですネ」

「そういうわけじゃ……」

言い淀んだあたしを見て、榊の目からまた涙がこぼれた。大量に。
大号泣ってテロップがついてそんな勢いで。

「さ、榊。あのな。別に、後悔してるわけじゃなくて――」

「……じゃあ、なんで、無かったことに……したいんですか」

「だからそれは、榊の将来をだな」

「山本先生っ！」

キッと涙目でにらまれてあたしは思わず怯んだ。

「なっ、なんだよ……」

「僕は、僕は初めてだったんです」

「……は？」

い、いったい何を言い出すんだこの子は。

「初めてだったのに、自分より年上のひとに良いようにされて、僕のプライドはボロボロです」

いや、なんかすごいこと言ってるけどまさか本当じゃないよね、それ。

……目がマジだ。

怖いよ。

怖いよ、この子。

なんか知らんが、思いつめてる。

動揺しているあたしに構わず、榊は正座を崩さないであたしを見据えた。

「山本先生」

「な……なに？」

「責任とってください」

「責任って……？」

あたしは体温がグッと下がるのを感じながら、櫛に聞き返した。
はたして彼の答えは――。

「僕とつきあってください」

「……………」

マジですか。

*

二、月曜日の憂鬱

頭が痛い……。

週が開けて月曜日。あたしは憂鬱な気分で出勤した。

榊と学校で会うのがすごいヤダ。

いや、まあ、先に手え出してんのはあたしのほうだし、自業自得
というか、報いというか、わかっちゃいるんだけどさ……。

この気まずさをどうしてくれよう。

『山本先生！ おはようございます』

なーんて。

職員室で顔を見たたんにもものすごい破壊力の天使スマイルで挨拶しやがって、あいつ。

この週末になんかあったと勘ぐられるに決まってるだろう？

空気よめ！

あああ、せっかくあたしがお前の将来考えて、朝一番に同期で
チの松島友紀まつしま ゆきに「暑気払い、榊君とばっくれたでしょ？ どうなの、
うまくいったの？ お持ち帰り？」とか聞かれても「んなわけない
でしょ。先輩として教訓垂れてたのよ、居酒屋で」なんてうまいこ
とやってやったというに。

これであたしみたいなアラサー独身女教師の餌食になったと悪い
噂が立つんだぞ……。

「はあ……」

一日、生きた心地がしなかった。

榊のあからさまな態度が、教師の間ではもちろん生徒らにも広く知れ渡って、あたしは授業中以外は理科準備室にひとりこもっていた。

昼のチャイムが鳴るころになって、榊があたしに告白してオッケーされたのだという話を伝え聞いた。

……榊自身が話したのはきくと、「自分が告白したらオッケーしてもらえたんです」ぐらいだっただろうに、あたしのところに来るまでに、

『実は榊が一目惚れで』

(ねえわ!)

だの、

『親同士が決めた許婚』

(あるかよ! もっとねえわ!)

だの、

まあ付いてくること余分な枝葉が。

それを聞いたあたしは訂正する気力もわからず、テキトーに受け流した。

それが逆に信憑性を高めることになっちまった。

『やまもっさんが否定しないぞ!』

と。

ああ、否定はしないさ。

付き合うことになったのは確かなんだから。

だからほっといてくれ。

ただでさえ、これからどうしようかと悩んでるんだから。

まったく頭が痛い……。

軽くため息を吐いて、こめかみの上のあたりをグリグリと押さえる。

ああ、タバコ吸いてえ。

「やまもっさん、具合悪いんじゃない?」

「あ?」

赤点組に課題のプリントをやらせている間、暇を持て余して窓際でぼーっとしていたら、唐突に言われた。

ちろりと目をやると、一番前に座っていた生徒が上目遣いであたしを見ている。

「さっきから頭痛そうにしてるし」

よく見てんな。

つか、よそ見る暇があったらさっさと課題を終わらせろ。誰のために残ってると思ってるんだ。このガキ。

「ただの二日酔いだ、二日酔い」

「でも顔色も悪いぜ」

「……………」

あたしのことを心配しているふうに言ってるが、別の期待感がこもってるのがバレバレだ。

後ろにいた生徒らも似たような目でキラキラ見上げてくる。

「マジで？ やまもっさん、病院行ったほうがよくね？」

「最近風邪流行ってんしね」

「そうだそうだ。帰ろ帰ろ」

「……………」

にわかに騒がしくなった赤点組にあたしは冷ややかな視線を返した。

やつらの期待感に満ちた目の輝きが急激に力をなくして消えていく。

「ほお、ずいぶん優しいな。そうかそれほどあたしを愛してくれてるわけか。こりゃ応えなきゃなんねえな。お前らが優秀な成績を修めて国立大に合格できるようにビシバシ気合い入れてやろう」

「あつ、いや、いいですごめんなさい」

慌てて首を振る前列のやつに、あたしはニタリと笑いかけた。

「そう遠慮するな。いくらでも付き合ってやるぞかわいいお前らのためならなあ。そういうわけで、課題のプリントあと五枚追加な」

「ええええええ」

「そりゃないよ、やまもっさん！」

「やかましいわ。だいたいその程度のプリントで点やるわけねえだろ馬鹿が。お前ら中学でなに勉強してきたんだ。今頃裸子植物とかアホか」

「だって、生物なんか受験関係な――」

そいつは言いかけた口を自分でバツと塞いだが、時すでに遅し。ピクピクと口元を震わせて笑うあたしの“夜叉スマイル”に、全員青ざめた。

「そういう口は、テストでいっぺんでも二桁点取ってからききやがれ！！」

＊

「だいぶお疲れだな」

夜の八時まわって、やっと赤点組みの補習を終えて職員室に戻ったら、あたしの顔を見てそう笑ったやつがいた。

隣の席の眼鏡男、野田啓一郎のだけいいちろう

古文の教師であたしと友紀の同期。ついでに高校からの腐れ縁。遠慮しないですむ相手にあたしはホッと力を抜いた。これで戻っても職員室にいるのが教頭だとか主任とかだったら死ぬよ、あたしや。

「なに？ そんなひどい顔してる？ あたし」

思わずほっぺたに手をあててみる。ぶよん、とたるむ感触。うわー、むくんでんなー。帰ったら蒸しタオルやろ。

「オッサンみたいだ。お前少し女あげないと、できたばかりの彼氏に嫌われるぞ」

「……」

「しかしまあ、山本が恋人をつくるなんてな。『一生独身でいる』って言ってたのはどうしたんだ？」

「……諸事情ありまして」

「まさかホントに親の決めた婚約——」

「アホか！ あるかよ！ 何年あたしとダチなんだお前。親いないの知ってるだろ」

「ん、まあね」

あ、こいつ、あっさり引き下がって。からかったな？

「じゃあ、榊の話が本当だってわけか。どういう風の吹き回しだ？ 職員連中、明日は雪が降るぞって言ってるくらいだぜ」

「深く聞くな。男だろ」

短く、言い放って、あたしは補習のプリントを広げた。

汚い字ののたうちまわる紙と格闘を始めたあたしに、野田はそれ以上追及はしてこなかった。

隣り合う席でそれぞれ自分の仕事を片付け、9時をまわってノートパソコンを閉じる音が聞こえた。

「お疲れさま。お先に」

「ああ、おつかれさん」

声だけの挨拶。

呆れて笑うような気配。

いつものことだ。

だれもいなくなった職員室に残って、あたしは赤点組みのプリントを機械的に見ながら、ほかの事を考えていた。

別にな、たいして理由があるわけじゃない。

あたしの家庭環境を知ったやつはちよつと同情的な目であたしを見るけれど、違うんだ。

そりゃ、両親いなくて身内つつたら母方のばあちゃんだけっつゝ家は普通じゃないさ。でも、あたしはたぶん「普通の家」で育っていて、こんなだったと思う。レンアイしないで、男作らないで、独身宣言を早々に出しただろう。

家は関係ないんだよ。まあ、ばあちゃんの生き方がちよつとは影響してるかもしれんけどね。両親亡くした赤ん坊のあたしを引き取って女手ひとつで育ててくれたばあちゃんは、なんていうか、「かっこいい」んだ。あたしも「かっこいい」女になりたい。そう思っている。

それが、他人、特に男から見ると「山本ってサバサバしてるよな」ってことになるらしい。

高校時代からこのかた、レンアイしたことはない。

あたしが普段から男に媚びなくて、あっさりしてて、レンアイ興

味なしという態度を貫いていたから。セックスの経験はあるけれど、いわゆる「お付き合ひ」はしたことがない。

だってよ、周りの女子連中がばっちり気合い入れて飾ってんの、あたしは大学卒業するまでまともに化粧したこともなければ、髪も適当、服なんか制服以外でスカートはいた覚えがない。そんな見るからに地味な女子、しかも男勝りで、口は悪いし、独立心旺盛だし、可愛げのかけらもない女に言い寄る奴がいるか？

……。

いたけどね。

びっくりなことにね。

「お前馬鹿か？」と言ってフツた。

それが野田だ。

あたしがオツケーするなんてこれっぽっちも思っていなかったらしい野田は（じゃあなんで告白するんだ？ と不思議でならんが）別にあたしがフツたからって関係が終わるようなこともなく、だからと当たり障りのない友人関係が続いている。

つかず離れず。体の関係もなく。

しかし野田め。人の苦勞も知らんでからかいやがって。

お前女子生徒から密かに告白されてんのも知ってんだぞ。

くそ、人のこと笑える立場かよ。

あいつ、後でシメる。

「山本先生」

「ああ？」

頭の半分以上野田への愚痴で、残り半分以下で課題プリントの採点やってたあたしは、頭の中の口調のままものすごい不機嫌な声で思わず返事をして、

一瞬後、我に返った。

「榊」

顔を上げるとあたしの真後ろに立ってる榊の苦笑が目に入った。
両肩に乗った手がグイグイ動き出す。

「うがががが」

い、色気ねえ。

「背中曲がってますよ」

「イテテ……。あゝ、すまん。って、お前まだ残ってたのか？」

「……………」

はあゝと深いため息。

あ、あれ？

「夕莉さんを待ってちゃ悪いんですか？」

見上げたあたしに、そのまま同化しちゃうんじゃないかと思うくらい顔近づけて、榊が言った。

って！

ちよつとまでここは学校だ！

「もう誰もいませんよ」

「アホか！ 学校は学校だわきまえろこの馬鹿」

ぐあし、と両手で櫛の頭つかんで引き剥がす。
なんか拗ねたような非難の目がこっちを見ているけれど、知るか。

「でも僕たち恋人同士でしょう？」

すこしくらいいちゃついたっていいじゃないですかと口を尖らせる櫛に、あたしはお灸を据える。

「あのなあ。生徒にしめしがつかんだろ。どうすんだお前、部室でいちゃついてるやつら見たら注意できんのか？ 自分がやって、それくらい考えろ」

「冷たい……」

「冷たくねえよ！ 学校はやめろ言ってるんだ」

ったく、わからんちんめ。

残った採点を猛烈に再開したあたしに、横で櫛は頬杖をついて笑顔で話しかけてきた。

「じゃあ今日夕莉さん家に寄ってもいいですよね？」

って。

「は？」

「いいですよね？」

天使スマイルで。

「……」

ああ、あたし。

なんで櫛に手を出した。

*

三、櫛光の独白

山本夕莉、やまもとゆうりだって。

名前と同じで、ベタな顔だな。

それが俺の第一印象。

教育実習先を選んだ高校で、俺の指導教員として選ばれたのは、5つ年上の女教師だった。

まあね、同じ生物教師だし。理科の担当教師の中じゃ一番若くて下っ端だったからだろう。面倒見ろ、ってわけだ。

どこも一緒だな。新人の面倒はその上のやつが見る。

別に俺に指導なんて必要ねーよ。

そんなもん、あったってなかったってうまいことやってきたし？

この見た目に嫉妬したやつの恨みならかったことあるけど、人間関係で敵なんてつくったことない。

生徒相手だって要は同じだろ。うまいことやりゃいいんだよ。俺ら先生の話なんて半分も聞いてなかったじゃないか。今の高校生もそ

う変わんないよ。生物なんか、赤点取らせなきゃそれで済むわけだし。

あーあ、かったりい。

って、口に出しては言わない。

当たり前じゃん。そんなん口に出したらただの馬鹿だろ？

いままで猫被ってたのが水の泡だ。

なんのために生物教師になったかって、生物ならテキストやっても平気だからだ。普通校ならなおさら。教科書の通り教えていけばいいだけだし。まあ生物嫌いじゃなかったっていうのもあるけど。そんなオイシイ仕事、手に入れる前にパーにしてたまるか。

「紳です。よろしくおねがいします」

紹介されたその場で愛想よく笑って頭を下げる。

当たり障りなく、だれにも必要以上に干渉されずに生きていくために身につけた俺の特技。

とりあえずニコニコしてりゃあ、印象はいいし、踏み込まれないからな。

「おう」

紹介している最中もどこか他人事だった彼女は、俺よりかったるそうに生返事をした。

人が頭下げてんのに椅子に座ってなんか計算している。

こいつ、何考えてんだ？ 顔合わせだぞ？ 普通目くらい合合わすだろ。

そう心の中で睨みつけていたら、火のついていないタバコを口の端にくわえたままチラリと顔を上げた。

それにしても地味な女。

髪にパーマもあててないって、マジかよ。

男いないんだろうな。いなさそうな感じ。

「榊……ひかる？ ひかり？」

「あ、ひかるです」

俺の名札を見て首をかしげる彼女に、心の中の毒舌はみじんも出さず笑顔で答えてやったら、

「ひかる、ね。まあよろしく」

彼女はそう、普通に返した。

へえ？

俺の愛想笑いに騙されない女初めて見たよ。

まさか男に興味ないとかか？

うわ、きめえ。

リアルだと引くなあ。

「悪い、今これ決済もらわないといけないんだ。五分待って」

そこテキトー座って、と自分の隣のだれも使ってない椅子を指し示し、彼女はパソコンに集中した。

五分ね。時間はかっといたる。

腕時計の分針に目をやる。

それから彼女の横顔に視線を戻す。

彼女が猛烈な勢いでキーボードを叩いてエンターキーを押すと、俺のすぐ横のプリンターから紙が吐き出される。

それをひらりと取って30秒目を通し、端に印鑑を押して主任のところを持っていく。

一礼して、帰ってくる。

ホントに五分だった。

うわ、サイアク。

仕事できて男いない女か。

しかも俺、というか男に興味がないときた。

マジかよ。ウザいだろうなあ。やたらダメ出しとかすんじゃないかね？
しかもヒステリ気味にさ。

そう思っていた。

現実はずっと困難だった。

「ああ、榊。そりゃダメだ」

は？

テストで赤点取ったやつらの補習の予定をシミュレーションでやらされて、作ってる最中に鋭い突っ込みが飛んできた。

横から。

なんかやたら重そうな資料胸に抱えたまま、身をかがめて俺の机にあった紙を指差す。

否、紙に書いてあった名前に。

「こいつは別の課題させるから」

はあ？

別の課題ってなんだそれ。わざわざ別の課題組むつもりなのかこの女教師。馬鹿じゃね？

「えっ？　でも」

「でもじゃねえよ。あたしらの都合で生徒の補習組んでどうすんだ榊。あたしらが楽するためにやるんじゃないんだぞ」

ぴしゃり

有無を言わさない厳しい口調。

思わずピクリとこめかみが震えて、グッとことばにつまった。

むかつく。

言われることが正論だから、なおさら腹が立つ。

生徒に合わせて課題作るって？ そんなもん、だれがやってんだ？

出来ないやつは出来ないんだよ。いちいち相手してられるか。

しかも俺たちの教える科目は生物だ。よっぽど好きじゃない限り、受験にも人生にも関係ない。好きな奴だけ勉強すればいいじゃないか。

そんな俺の考えを、彼女は自ら態度で打ち碎いた。

授業に手を抜かない。

テスト問題にも手を抜かない。

生徒たちに見えないところで、準備に時間を費やす。

赤点組みにもとことんつきあう。

口は悪いけど、面倒見はいい。

ああ、マジむかつく。

くそっ。

なんなんだよあの女。

柄悪いくせにやってること正しくてさ。

反撃する隙がない。

ああ、むかつく。

だいたい俺は誰かに「指導」されるなんて嫌なんだよ。

それなのにこの女はまともに指導しようとする。当たり前のように。淡々と。

くっそ。

生徒とか職員連中の話じゃ、別に男に興味がないわけでもないらしい。

じゃあなんで俺の愛想笑いが通用しないんだ!?

他のやつら見ろよ。堅物で有名な教頭だって俺には態度が柔らかいんだぞ?

誰に対しても裏表ないってことか? そんな人間いるかよ!

絶対なんかあるに決まってる。

もしかして、演技でもしてるんじゃない?

絶対そうだ。

よし、

すこし弱みを握ってやろう。

そう思った俺に絶好の機会は回ってきた。

*

「お疲れさまでした」

ほろ酔い加減の連中が道路ばたで互いに頭下げてニコニコ笑っているのを、俺は”酔ったふり”をして見ていた。

職員の暑気払い。

二次会のカラオケもお開きになって、三次会行くかどうかって話。

仲の良い松島って教師が主任とかに絡んでいるのを、山本夕莉は少し離れた場所でタバコ吸いながら待っていた。

だいぶ飲んでたからだろう。素面でいるつもりらしいけど少しフラフラしている。

それなのに、タバコの灰はちゃんと携帯灰皿に落とす。

酔っ払っててもマナーは守る。変な女。

「ゆーりー、あんたこれからどうすんの？」

泥酔の一步手前といった感じで松島先生が彼女に絡んでくる。

「あ？ 帰る」

「あああ？ 帰るだああ？」

「だぁもう、この酔っぱらい。あんた今日高木さんいるんだろ？ 休みのときくらい一緒にいれよ」

「結婚したら嫌でも一緒にいるからいいの」

「アホか。婚約破棄されんぞ」

「それはヤダ。いいのよう。りょうちゃんならわかってくれるから。明日デートするし」

「ならとつと帰りな。あたしも明日は用事があるんだ。つうか早く帰って寝たい」

「まだ11時よ？ 年寄りくさいわねえ。しょうがないなあ。あ、榊くん！ 悪いけどこの人送ってあげて」

いきなりこっちにふられた会話に、俺は曖昧に微笑んで返した。すると山本夕莉はものすごく眉間にしわをよせて松島先生を小突いた。

「はあ？ 何言ってるんだよ友紀。送られなきゃいかんのはお前だろ」

「わたしは杉本大先生にらせていただきますので！」

なぜか敬礼して答える松島先生に、彼女の目が半眼になる。

「……それって四次会確定……まあいいか。知らね。好きにしな」

「んじゃねえ、ゆうり、榊くん！」

ばいばい、と手を振って、松島先生は四次会確定メンバーの待つ駐車場のほうへ行ってしまった。

なんなんだ今の会話。
女の酔っぱらって、わかんねえ。」

「柿」

「はい？」

微妙にろれつの回ってない声で呼ばれて、愛想よく返事をする。

「お前も帰るだろ？　じゃ、また来週月曜に」

軽く手を挙げて会釈し、そのまま踵を返した彼女に、俺はあわててついていく。

おいおい。逃がすかよ。

やっとふたりきりなんだし、このチャンス逃すわけないだろ。
この女が本当に俺をどうとも思っていないのか、それとも演技して隠してるだけなのか、試すにはちょうどいい。

「……なんでついてくる？」

「松島先生に山本先生を送るように言われましたから」

「……」

「というか、山本先生も酔ってますよ。危ないですから、僕ちゃんとご自宅までお送りします」

いいですね？　と笑顔で念を押す。

彼女はうまく回っていないらしい頭で考えるのを放棄して、「ああ、そう」ただけ言った。

学校からそう離れていない場所にある单身者向けのアパート。

階段を上る音が深夜の住宅街に響く。

俺が後ろから支えてやらないと今にも落ちそうなくらい危なっかしい足取りで階段上ってるくせして、「大丈夫大丈夫」しか言わない。

くくっ、酒は弱いわけか。

弱点ひとつ見つけた。

あとはどうやって化けの皮はがしてやるかだな。

「すまん。ありがとう。氣いつけて帰れよ」

玄関の前で礼を言う彼女に、俺は今まさに具合が悪くなったふりをした。

「すいません山本先生、トイレ貸していただけませんか？」

「なんだ、気持ち悪いのか？ それならそうと早く言えよ」

何の警戒もなく鍵を開けて、俺を部屋に上げる。

男慣れしてるっつーより、やっぱこいつ俺を男として見てないな。いやいや、さりげないふりして実はあわててるんだろ。

絶対そうだ。

「大丈夫か？ 水持ってくるから待って——」

「先生」

がちや、と玄関のドアが閉まるのと同じタイミングで、俺は彼女の腕をつかんだ。

「ん？」

酔っ払っているからか、少し潤んでトロンとした目が見上げてくる。

一瞬、時間が止まった。

「神？」

やばい、と本能的に感じた。

次の瞬間我に返った俺は、スッと伸びてきた彼女の手に頭の後ろを撫でられて、

逆に食われてしまった。

＊

不意に目が覚める。

自分の家のベッドじゃないベッドだった。

ああ、そうか。

また来たんだっけ。この部屋。

隣を見ると、無防備に寝ている彼女の寝顔があった。

別にすごい美人というわけでもない。普通の、どこにでもいる、平均的な容姿。

どうして俺、ヤツちまったんだろ？

経験がなかったわけじゃない。

男だぞ。いまどき20代で童貞な男なんているかよ。恋人いなかったって風俗行くだろ。しかも俺だぞ。付き合ったことないわけないだろ。

しかし彼女は、「初めてだった」という俺の嘘を信じたようだった。

なんかこう、すごく、ムツとする。

ああそうですか童貞と間違えるテクニックだったというわけですか。どうせ主導権握られてましたよ。つうかあんたなんであんな上手いんだ？ 付き合ったことないんだろ？ まさかバイトでもやってたんじゃないだろうな？

ないか。

そりゃないな。

どんだけ柄悪くてもやることはまともで真面目だからな。

その割には俺とセックスしたのは何でだ？

しかも別に俺のことが好きだってわけでもないみたいだし。

くっそ、どこまでも人を馬鹿にする女だな。

「う、ん……」

寝返りをうった拍子に彼女の髪の毛が俺の鼻腔をくすぐった。

セックスする前にシャワーを浴びて綺麗に洗われた髪の毛は、うつすら石鹸の香りがする。シャンプーじゃないところが彼女らしい。

ん？

彼女らしいって何だ？

おいおい。

まさかだろ。

俺が本気で相手にするわけないだろ。

隣に並んでみろよ。一メートル以上離れたら「赤の他人」にしか見えないぞ。それくらい、俺と彼女には接点がない。ただ高校教師ってだけだ。

しかもこいつだって「俺を本気にしてない」んだぜ？

「……ん。榊？」

ジッと寝顔を見ていたら、彼女が目を覚ました。

まだ真夜中に近い明け方。

薄暗い部屋の中で、ただ見つめあう。

「朝か？」

「……」

「ああ、お前、一度帰るんだろ？ 悪いな。送ってやれなくて」

酒飲んだから運転できないし。

って。

何言ってるの？

普通逆だと思っただけどその台詞吐くのは。

「氣いつけて帰れよ。遅刻すんなよ。学校あるんだから……」

ぐりぐり、俺の頭に手を伸ばして撫でたあと、またまどろみの中に沈んでいく。

現の世界にひとりぼっちで残された俺は、軽く舌打ちして起き上がった。

上等だ。

こうなったら自棄だよ。

絶対俺に本気にさせてみせる。

＊

四、事情

「さあて。どういふことか説明してもらおうかなあ？」

「あ、生ひとつ」

「ちょっと、無視しない！」

ちっ。

「お互い忙しい一週間が過ぎ、いつもの金曜日。

あたしは友紀といきつけの飲み屋にいた。

アラサーの女二人で飲むなって？

センセイってお仕事はなあ、飲みたくなるときがあるんだよ。し
かも頻繁ひんぱんに。

友紀は恋人どころか婚約者がいるが、こっちも仕事は忙しいお医

者のセンセイ。

だから必然的にあたしらはつるんで飲むようになった。

恋人がいようがいまいが、あたしらのこの恒例飲み会は男に邪魔されることなく続くはずだったんだ。

つい先週までは。

「遅れてすいません」

ごくごく簡単に簡潔に経緯を説明するために頭の中で言うことを取捨選択していたら、一旦家に帰って着替えてきた榊がにこやかに現れた。

「はーい、待ってたわよう。夕莉に聞くより榊くんに聞いたほうが早そうね」

すでにジョッキの生ひとつあけた友紀は上機嫌でニコニコ手招きする。

ああ、今日何時に帰れるかな。

少し頭を抱えたあたしに、「どうしました？」とフォロー入れて、榊は当然のごとく隣に座った。

ていうか近い！

近い近い！

「何の話ですか？ 松島先生」

「どうしてお付き合いすることになったの？ この間の暑氣払いでなんかあったんでしょ？ 詳しく聞きたいわ」

こらこら。先輩特権で聞き出そうとするな。

「なんでだよ。詳しく聞いてどうする」

「だって、興味あるじゃない。夕莉が彼氏作るなんて前代未聞だし！ ノダッチも言ってたよ。やっぱ男は顔？」

「ちげえし！」

まったく、友紀といい野田といい、あたしのいないところでそんなこと言ってるのか？

「ねえねえ、なにがあったの？ 榊くんが告白したの？」

「そうですよ」

ニコニコ、慈愛すら感じるような天使スマイルで榊が答える。

「ええええええ、やっぱり？ ほんとに一目惚れだったとか？

まさか親の決めた婚約はないよね？」

「こらこらこら！」

「ねえよ！　そもそも親いないし！　てかお前も知ってんだろ友紀」

「ん、まあね」

うわ、野田と同じこと言いやがったこいつ。

「親がない？」

それまでニコニコして枝豆つまんでいた榊が怪訝そうに眉を寄せ
る。

友紀がそれを聞いて目をパチパチさせた。

「あ、知らなかった？　てか夕莉教えてなかったんだ？」

「え？　いや別にわざわざ教えることか？」

「わざわざ教えることでしょ。付き合ってたんだよ？　もう、
夕莉ってそういうところドライっていうか、冷めてるんだから」

「そうかな？」

「ご両親いらっしやらないんですか？」

心なしか非難気味な目で榊があたしを見つめてくる。『なんで言

ってくれなかったんです』みたいな。いやいや、別に他意はないんだけど。

「ああ。一歳ん時に飛行機事故で仲良くあの世に行った」

「……知らなかった」

「ひどいよねえ榊くん。お付き合いって言ったらもう赤の他人じゃないのにさ」

「待って。隠してたわけじゃ――」

「わかってるわよそれくらい。だから夕莉はドライだって言ってるの」

「……」

なんかむかつくな。何で責められなきゃならんのだ。だいたい聞かれたわけでもないのにそんなことまで話す？

苛立ち紛れにあたしはジョッキをあおった。

「まあ、そこが夕莉らしいって言えば夕莉らしいところんだけどね。自分のことは棚上げっていうかさ」

「友紀お前もうすでに酔っぱらってんな？」

「まだまだ。ねえねえ、榊くん。告白ってどんな感じでしたの？
どこで告白したの？」

「え？ ああ、山本先生の部屋で」

ぶっ！

危うく手羽先を噴き出すところだった。

隣を見ると、「ん？ なにかおかしいなと言いましたか僕」みた
いなわかってない顔。

あのなあ。何気なくあっさりそういうこと言うな榊！

友紀のネタになるだけだろうが！

見ろ！ 面白そうと思って目がぎらぎらしてんぞ。

「ホントに？ なんだ、やっぱり榊くんとばっくれてたんじゃな
い夕莉」

「いやお前が言ったからだろこいつに。あたし送れって」

「そんなこと言ったっけ？」

酔っぱらい！ 酔っぱらいめ！

「確かに松島先生にそう言われましたけど、言われなくても送りま

したよ」

「……」

「きゃあああ！ ちょっとちよっと、愛されてるわね夕莉！ じゃあ榊くんはチャンス狙ってたんだ？」

「まあ。そういうことです」

いたずらっぽく笑って冷奴をつつく榊を、あたしは頭痛がし始めた頭で呆然と見た。

あああ、やっぱり手え出すんじゃないかった……。できるもんなら一週間前に戻りたい。

「そうなんだ。じゃあ榊くんが一目惚れって線はあながち間違ってもないわけね。だけどさ、ぶっちゃけ聞くけど夕莉のどこが良いの？」

「おい！ ぶっちゃけすぎだ友紀！」

「山本先生は先生としても尊敬できる先輩ですから」

「そっか。指導受けてやられちゃったのか。どの辺がポイント？」

「友紀！」

「真面目で優しくて良い方だなと思って」

「へえ！ 夕莉よかったわね指導が報われてんじゃん。あんた誤解されやすんだから榊くんみたいな男の子貴重よ？」

「……………」

もう勝手にしてくれ……。

いちいち突っ込んだり反論する気力を失って、あたしは力なく竹輪に箸をつけた。

こうなったら自棄だ。今日は飲んでやる。

「すいません。生ふたつ」

「もう夕莉ってば照れちゃって。榊くんごめんね？ この人天邪鬼だからさ。しかも不器用だし。恋愛ベタだし。愛してあげてね？」

「？ はい」

同じテーブルだけど横で勝手に盛り上がるふたりをほったらかして、あたしは運ばれてきたビールを飲み干した。

＊

「よかったじゃん」

二時間近くテーブルを占拠して存分に楽しんだ友紀は、榊がトイレにいった間にあたしにそう言った。

「なにが？」

「『真面目で優しくって』って、ちゃんとわかってくれてたから」

あたしを見る友紀の目がちゃんとしてて、それがからかいでも冗談でもなく本気なんだとわかる。

「私さー、榊くんのことちょっと誤解してたんだよね。あの子、いつも笑ってて、でもなんか人を寄り付かせないオーラ出てるじゃん。にこにこしてるけど、こっち来るな、みたいなさ。あの顔だからそれでも可愛がってもらえるしそれでいいんだろうけど、夕莉とガチでやったらちよつと問題になるかと思ってたんだ」

「どういう意味？」

「あんた最屑しないから」

「……」

「相手が榊くんだろうと教頭だろうと、同じこと言える人間じゃない、夕莉って。そういうところがね、榊くんの世界踏み込んで反発受けるかなーと思ってたの。でもよかった。あの子もちゃんとわかってんだね。あんたの熱血指導」

「熱血って。そこまでスパルタやってないよ」

「そう？」

面白そうに笑いながら友紀は芋焼酎を飲んだ。

「5組の橋田とか、いつもぶうたれてるよ。この間課題のプリント追加したんだって？」

「あれは当たり前です。ていうかお前にぶうたれてんのかあいつは。ぶうたれるくらいなら勉強しろってんだ」

「あはは。まあ、『教師の心生徒知らず』だよねえ。だから榊くんがわかってくれてよかったねって話」

「別に……それで困るのはあいつ自身だからな」

「んもう！ 照れ屋さんなんだから」

「照れてない」

そんなこと。

だって、任されたからには面倒見るって、当然じゃないか。

適当に指導してそれで困ったことになったらだれが責任取るんだ。

適当やってた自分の責任もあるじゃないか。

あたしはそれが当然だと思っているから、別に理想でもなんでもないし、当たり前のことをやってるだけだ。

あたしがちゃんと向き合って指導してもダメだったら、そりゃそのときさ。

どうするかは榊が決めることだからな。あたしは道を教えるだけ。背中も押さないし、無理矢理手え引っ張って行くこともない。ばあちゃんがあたしにそうしてくれたみたいにさ。

ちょっと感傷的な気分になりかけたのが嫌で、あたしはグラスに残ったハイボールを飲んだ。

「お待たせしました。トイレ混んじゃってて」

ひとりだけ酒を飲んでいない榊が、普段のようにニコニコ笑って戻ってきた。

「そろそろお開きにしようか」

「そうだな。もういい時間だし」

「私はダーリンに迎え来てもらうから、お二人はご自由にどうぞ」

「なんだよそれ」

「やあねえ。野暮なこととはしないって。蜜月期をお楽しみなさい。えーと、私のぶん、これで足りると思うからよろしく榊くん」

そう言いながら、友紀は財布から4千円出してそのまま榊に手渡した。

ホストに小遣いやるみたいな画になってんぞ。

「はい」

「じゃそういうわけで。また月曜日に」

「こけるなよ友紀」

「らじゃ」

上機嫌で手を振って店を出て行く友紀の後姿を見送って、あたしはまだテーブルに残ってる料理に眉を寄せた。

もう、だれだよシーザーサラダ頼んだのは。最後まで食べよな。

「悪い榊、会計頼むわ。あたしもちょっとトイレ行って来る」

「はい」

申し訳なさ程度にテーブルの上を片付けて立ち上がる。

と、想像以上に酔いが回っていたせいかふらついてしまった。
そのあたしのからだを榊の手がすかさず支えた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、すまんすまん」

おかしいなあ。

20のころはこんくらいじゃ酔わなかったのになあ。

これも年のせいかな？

あゝちくしょ。

「大丈夫大丈夫」

トイレまでついてこようとする榊をやんわり押し留めて、あたしはトイレに入った。

洗面台の上の鏡で顔を見る。

酔っぱらってひどい顔をしている。

こんな女が榊の隣歩いてても、だれも恋人同士なんぞ思うまい。
職場の同僚以外なものでもない。

榊のやつ、どうしてあたしなんかと付き合う気になるんだか。よくわからん。

まあ気の迷ってやつもありうるしな。

教育実習生だから、いつまでもいるわけじゃないし。
実習終わったらそのうち飽きるだろ。

それまでの間、あいつの酔狂につきあってやるのも、まあいいか。

パチパチと軽く頬を叩いて目をすっきりさせ、トイレを出ると店の出入り口で会計を済ませた榊が待っていた。

「行きましようか？」

どこに？

一瞬馬鹿みたいに聞き返そうとして、ハタと気づいた。

そうか。

あたしの部屋だよな……。

*

五、改造作戦

やや二日酔い気味のアルコール濃度と、寝不足のダブルパンチで頭が痛い。

あたし月曜もこんなじゃなかったか？

ああ、やだやだ。年取るって。まだ一応20代なんだけど、このテンションの違いはなんだろうか？

「夕莉さん、あそこですよ」

コインパーキングに車を停めて歩くこと10分。

アーケードの中ほどに櫛がどうしても行きたいと言った店があった。『nana』と看板が出ている。

「あそこって、お前……」

どうみても美容室にしか見えんのだが……？

「僕と同級が働いてるんです。夕莉さん紹介したくて」

ふーん。同級がね。

いや、待て待て。

なんか知らんが、休みの日の朝の9時に強引に約束を取り付けられ（休みは休め!）、8時すぎにはアパートのインターフォンが鳴らされ（まだ寝ていたかったのに……）、寝起きのものすごい顔をニコニコ眺められたあげく、まだ頭半分寝ぼけた状態で車に押し込められ（軽く拉致だろ）、その理由が榊のダチに顔見せって……。

「行きましょう」

終始ご機嫌な榊の笑顔にあたしは思いつきり渋い顔をした。

「まともに化粧もしてねえのに顔見せに行けるかよバカらしい。それならそうと最初に言え」

「大丈夫ですって」

「やだよ。お前な、微妙な年頃の女をおちよくるんじゃない」

「夕莉さん、バラシマスヨ？」

うつ。

ぎくりと身を強張らせて榊を見る。

目が、目が笑ってないぞ。

マジかよ、脅されてるあたし？

「さ、まだ他の客もないことですし今のうちですよ」

一瞬の緊張の後、動揺して動けないあたしの腕をがっちり掴んだ
榊は、そのままズルズルと店まで引っ張っていく。

「いらっしやいませ」

普段なら絶対行かない、というか今まで行ったことがないあたし
と最も縁遠い雰囲気美容室に入ると、中にいた店員が一斉にこち
らを向いた。

うわー、住んでる世界が違うわ。

開店直後のエネルギーに満ちたさわやかな空気感が、二日酔いと
寝不足のテンションをますます低くさせる。そんなあたしの様子に
かまうことなく、榊はにこやかに挨拶してひとりの店員を呼んだ。

「いらっしやい。待ってたぜヒカル」

背の高いイケメンが営業スマイルで近づいてくる。

「時間ぴったりだったろ。夕莉さん、こいつ早田直樹はやたなおきです。直樹、
この人が山本先生」

「早田です。よろしく」

「ああ、どうも」

ややぐったりしながら顔を上げる。
ふーん。イイオトコだなあ。

あれか。榊が天使顔だからか。
やっぱ類は友を呼ぶわけか。

「夕莉さん、今日予約入れておきましたから」

あたしが黙って彼の顔を見ているのをどう受け取ったのか、榊は
少しとげのある口調で変なことを言い出した。

「は？ 予約？？」

「ヒカルがこの前電話してきました」

と、早田さんが補足する。

いやいや、待て待て。

「予約って何の？」

「夕莉さんのスタイリングを」

「はああああ？？？？」

なんじゃそりゃ。

「待てよ、冗談だろう。あたしは間に合ってます。ていうか勝手に
予約入れんな、バカか？」

「いいじゃないですか別に髪の毛いじるくらい。夕莉さん髪の毛綺麗
だから今のままじゃもったいないですよ」

「余計なお世話――」

「バラシマスヨ」

ぎくうう……。

「ね？」

天使スマイルの裏になにか毒々しいのが見えたのは気のせいですか？

＊

「すいません、あいつ。甘えん坊で」

観念して椅子に座ったら鏡越しに早田君が笑いかけてきた。
笑った顔もイイオトコだなあ。

「大目に見てやってください。久しぶりなんで、うれしいんですよ」

「ひさしぶりって？」

「恋人できたのが」

そうか？

小首をかしげて、鏡の向こうでお茶を飲んでる榊に目をやる。
学校に来るときとは少し違う雰囲気だけど、注目を浴びるのはいつものと同じ。普通にモテそうなんだがな。

「そんなにひとりだったんですか？」

「高校以来ですよ」

「はあ？」

思わず変な声を上げたら、早田君はクスクスと笑った。

「オクテってわけじゃないですけどね。女性のほうが遠慮するみたいで」

「……遠慮ねえ」

あゝ。

確かにそうかもしれんな。

学校でも人気はあるけど告白する女はいないみたいだし。
なんていうの？ アイドル？
ただあこがれるだけの存在。

「なにか希望がありますか？」

「えっ？」

突然聞かれて、あたしは早田君に視線を戻した。

「髪型。こうしてみたい、的な」

あたしの髪の毛触りながら聞いてくる。

ああ、そうか。スタイリングだっけ。
って……。

「いや、別に。というかホントにいららないんですけど」

「あはは。もうずっといじってないでしょう？ シャンプーなに使用われてるんですか？」

「オリーブ石けんのやつを」

「ああ、どうりで。すごく良いですよ。あんまり、色とか落とすのもったいないですね」

「いやいや、色は。一応先生だし」

「そうですね。じゃあ、少し巻いてみるのはどうですか？ 緩めに

パーマかけるだけでも。扱いやすくなりますよ」

「切るだけでいいです」

「たぶんそれじゃあいつが納得しませんって」

「……………」

「ま、騙されたと思って、ちょっとオレに任せてください」

負けた。

くそ。

櫛の友達なはずだよ。人のことソフトに脅迫しやがって。

痛い頭で反抗する気力があるはずもなく、あたしはあきらめて肩の力をぬいた。

それを見た早田君は少し満足げに笑って、手際よく仕事を始める。彼があたしの首元にタオルを巻いている間に、他の店員さんが作業用のワゴン押してくる。ゴムの手袋をはめた二人はそのままブロッキングした髪の毛に刷毛でパーマ液を塗り始めた。

「本当に久しぶりなんですよ」

さすがプロだなあ、と感心してその手の動きを見ていたら、早田君は話を元に戻した。

「俺、彼女紹介されたの初めてだし」

「は？」

なにか空耳が聞こえた気がしたが。

「ホントですよ。あいつが自分の彼女だって俺に紹介したの、あなたが初めてです」

にっこり、営業スマイルで鏡越しに微笑まれる。

……空耳じゃなかったのか。

普通ならここで「ホントですか」なーんてリアクション返すなり、顔を赤らめるなりするんだろうけど、あたしは「ああ、そうですか」とひきつつた笑みを浮かべた。

「嬉しくないですか？」

鏡の向こうの目が少し驚いている。まあそりゃな、普通は嬉しいがよな。

「いや、なんというか……わたしもそう付き合いが多かったわけじゃないんで、慣れないというか」

めんどくさいとは言えないで、もっともらしく言い訳すると「ああ」と何故か納得された。

「聞いてます。山本さんずっとフリーだったんですよね。男めんどくさいですか？」

「……………」

「あ、すいません。つい」

二日酔いじゃない頭痛が始めたあたしを、早田君は必死で笑いこらえながら見た。

「それ、櫛に聞いたんですか？」

「いや俺の勘です。あいつよく言っていましたから。わからないって」

「わからない？」

「ああいう顔でしょ。それなり自信があるんですよ。まあ実際モテますしね。それなのに全然なびいてくれないって」

「……」

「話聞いてて、もしかしたらそうじゃないかな〜と。こういう仕事してると時々彼氏さんの愚痴聞かされたりするんですよね。山本さんもそのくちじゃないですか？」

「……まあ、遠からずつてところです」

「正直だなあ」

思わず、といった感じで彼は笑い声をあげた。

横で作業してる店員さんも肩を震わせてる。

窓辺のベンチに座って雑誌読んでた榊が目を上げて、少し顔をしかめた。

「人の彼女笑わないでくれる？」

「すまんすまん」

早田君は、櫛のにらみなんてまったく気にしないで仕事に戻った。頭にぐるりとタオルを巻いて、さらにパーマ液をかけられる。冷たい液体が頭を流れていくと少しだけ頭痛がおさまった気がした。

「何分ですか」

「三十分おいて」

他の店員さんがタイマーを準備するのを眺めて、あたしは「あ、そうだ」と声をあげた。

「はい？」

「終わるまでどんくらい時間かかります？」

「そうですね。最低二時間は」

二時間……。

美容室で二時間も拘束されんの初めてだぞ、信じられん。そのエネルギーも他にまわしたい。

……じゃなくて。

「榊」

「なんですか？ 夕莉さん」

「お前車戻って寝てろ」

「……え？」

「え？ じゃねえよ。お前昨日あまり寝てないだろ。さっきから欠伸ばっかしやがって。どうせ二時間はかかるんだ、戻って仮眠しろ」

榊は鏡越しに物凄くいやそうな顔をしたけど、あたしは断固として言い放った。

「居眠り運転で事故ったりしてみろ。わかってんな榊」

あたしの声が客のいない店内に響いて、さすがに榊もシュンと肩を落とす。

「……わかりました。でも終わったら電話してくださいよ？」

「わかったわかった」

「じゃあ……」

シユン、としたまま櫛はドアを開けて出て行く。

そのやり取りを半ば呆然と見ていた早田君は、しばらくして腹を抱えて笑い出した。

「あっははははは！ 山本さん、あなた最高です。ヒカルあの顔！ あはははははは！」

「……おかしいですか」

「すいません、あははははは。いや、安心しました」

「安心？」

「めんどくさいでしょうけど、あいつのことよろしくお願いします」
ぱちり、ウイंकしてみせた早田君に、あたしは脱力して「はあ」と言うしかなかった。

＊

六、動揺

信じられない。

デート中に「寝てろ」なんて言われたの初めてだ。
ほんとに俺のことなんとも思っていないよな、あれ。ああもう、むかつく。

寝てないのは確かだった。

金曜の晚にあいつのアパート泊まって、土曜日の夜帰って今日のデートコース調べてから寝たから、まともに寝てない。
それどころか、ここ一週間まともに寝てない。

山本夕莉と俺が付き合っていることは学校の連中にはもう公認の事実になった。それなのに、あいつの態度は変わることがない。

彼氏だろうと教頭だろうと同僚だろうと生徒だろうと、男に対して分け隔てない。

おかしいだろ。普通、少しは甘くなるじゃないか？ だけど学校でのあいつの態度は、「指導教員と教育実習生」以上にも以下にもなることがない。

変わったことと言えば、俺が山本夕莉のアパートに行くようになったことと、彼女と寝るようになったことだけだ。

セフレかよ！

馬鹿な。そんなはずない。

遠慮でもしてるんじゃないか？

そういや、この顔のせいで「榊君が私なんて相手にするわけない」とか言われたことはあるな。実際相手にしてない女だったから、スルーしたけど。あいつも似たような考えなのか？

確かに、俺と並ぶと絵に描いたような平凡ぶりで、見た目につりあってないのは誰が見てもわかる。

もし山本夕莉がそのことを引け目に感じて、俺を信用してないってなら、じゃあそのあたりから攻めればいいはずだ。

ちょうどカットモデルを探しているって言ってた直樹に連絡して、営業時間内のカットを強引にねじ込んだのは一昨日のことだ。

俺が俺のダチに「彼女」だと紹介すれば既成事実にもなるし、遠慮もなくなるだろ。

と、思っていた。

山本夕莉が普通の女じゃないってことを俺は忘れていた。

普通、彼氏の友達に紹介されるのを嫌がる女はいない。

普通、スタイリングするのを嫌がる女はいない。

普通、デート中に男に「車で寝てろ」なんて言う女はいない。

くっそ。

いろいろ考える俺のほうが馬鹿みたいじゃないか。

苛立ち紛れに二本目の缶コーヒーを飲み干し、公園の隅にあったゴミ箱に投げ捨てる。

するとちょうど携帯が鳴った。

電話しろって言ったのにメールだ。

『終わった』

って、

それだけ。

いい加減、ぶち切れそうになる。

あの女、どういうつもりだ。

＊

イライラした勢いで「nana」のドアを開けたら、見える範囲に山本夕莉の姿は見つからなかった。

ぐるりと見回していたら直樹と目があって、あごで指し示された。

中に入って、店の奥に向かう。

壁際のベンチソファ―に座って新聞広げてる女がいた。

だけど――。

「夕莉さん？」

信じられない。

「んあ？」

紙面から顔をあげて、俺のほうを見る。

まっすぐ見上げる視線に、身動きがとれなくなる。

ウソだろ。

「……………」

「どうしたポケットとして。ああ、そんなに変わったか？ あたし」

「……………すごく」

「オレの腕を褒めろよ、ヒカル」

どうしたらいいかわからなくて突っ立っている俺の隣に直樹がやってきて、得意そうにそう言った。

「よく似合うだろう？」

「こんな髪型やったことないから自分じゃわからんけど」

直樹の言葉にちよつと照れながら、山本夕莉は自分の髪の毛をつまんで苦笑した。

緩くパーマのかかった髪が顔のラインを綺麗に彩っている。

軽くメイクもされたらしく、整った眉にわずかに引かれたアイライン。やや赤みのかかったベージュのグロス。

学校で見るのとは全然違う。なのに、彼女らしい。

自分自身の動揺に混乱して、俺は馬鹿みたいに凝視するしかなかった。

そんな視線に気づいて、彼女は「コラ」と俺の頭を小突いた。

「なんか言えよ。おまえに付き合ってたんだぞ？」

「あ、ああ。びっくりしちゃって。……すごい、綺麗です、夕莉さん」

「そりゃどうも」

褒め言葉をまともに受け取っていない苦笑を返して彼女は立ち上がった。

「いくらですか？」

と、財布を出しながら直樹に尋ねる。

「ああ、えと。ヒカル？」

直樹の戸惑う声に俺はやっといつもの自分を取り戻した。

「え？ あ、ああ。いや、夕莉さん。いいんです。代金は」

「へ？ 何で？」

「オレの練習ですからいいんですよ、山本さん。ご協力感謝します」

「ああ、カットモデルだったの？」

「そういうことです。こいつ、要領いいんですよ、そういうところ」

「そうですか。なんか悪いですね。久々で気分良かったですよ」

「ありがとうございます。次もどうぞ、うちに」

「ああ。気が向いたら」

「ははは。お待ちしてます」

いつの間にか俺というよりも仲良さげになってる二人にちょっと面白くないものを感じて、俺は彼女の手を取った。

「じゃ行きましょう夕莉さん。直樹、またな」

「はいはい。またな」

＊

店を出てアーケードをしばらく無言でひたすら歩いていたら、引いていた手が不意に俺を引っ張った。

「おい！」

呼ばれて、ハタと気づく。

「あ、ああ。すみません」

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

不思議そうにクビをかしげて聞いてくる彼女は、絶対自分のことがわかっていない。

「そんなことは――」

ジッと俺の目を覗き込んでくる、その近さに動揺する。どうしたんだ俺！

いつもなら、俺の近さにこいつが動揺するのに。

「お前、寝てなかっただろ」

「え？」

「目が赤いぞ。ったく、しょうがないな。帰りはあたしが運転するから」

「は、はい」

「ちょっと早いけどとりあえず飯でも行くか？　美味しいイタ飯屋があるんだ。そこでいいな？」

「はい」

違う。

こんなはずじゃー！。

飯だって、ちゃんと行く店決めていたのに。
おかしい。

握ってる手から、わけのわからない熱が全身に広がっていく。

どうしたんだ、俺。

＊

七、変化

「やまもっさん!!??」

月曜日の朝。

職員駐車場に車とめて降りたところでばったり会った赤点組常連の橋田が、あたしを見て二秒後に絶叫した。

そのリアクションにあたしは半眼になる。朝っぱらから一番やかしい奴に会ったもんだ。これで昼までにまた『あることないこと噂が流れる』に一億ジンバブエドルかけてもいい。

おお、驚け驚け。

あたしだってまだ鏡で自分見て「だれだおまえ」と思うくらいなんだから。

「うわマジ!? どうしたん、その頭!」

ひとを指さして、ぶは、と笑いだした橋田の頭をむんずと掴み、あたしは指に力を込めた。

「このくそガキ、調子ノリやがって」

「痛い痛い痛い! ああ、中身はやまもっさんだった。安心した」

「中身はって。なんじゃそりゃ」

「でもホントどうしちゃったの、やまもっさん。俺らそんなやまもっさん見たことないんだけど」

「ああ、あたしも今までしたことないからな」

櫛のやつにまんまとスタイリングさせられて何年ぶりにパーマをかけたのは昨日のことだ。

美容室ではスタイリングもメイクもばっちりさせられたが、そのまんま学校に行くつもりはなかった。

なかった……んだが。

いつものようにおろしただけでも顔の横でクルクル巻いてる髪の毛は、ほとんど化粧しない主義のあたしの顔に似合わないこと似合わないこと。

しょうがないから普段とは違う色のアイシャドウと口紅をのせて、通勤途中のコンビニでチークを買って足した。ついでにヘアクリームも。

服だっていつものパンツじゃ様にならず、クローゼットからスーツのパンツをひっぱり出してはいて、上にはピンストライプのシャツをはおった。白衣を着たら「どこの女医だ」状態。眼鏡と靴そろえたらイメク（自重）

橋田は無遠慮に下から上までしげしげと眺めて、ニヤニヤ笑った。

「すげー。女って怖い」

「お前な……」

「マジ似合ってる。やべえし！　ぬける！」

「バカモンっ！！」

ゴチ、と容赦ないツツコミを入れると橋田は走って逃げ出した。昇降口の向こうから大声で笑う奴の声が聞こえてくる。

まったく、センセイをおちよくりやがって。

あいつ後で覚えてろよ。

頭の中で橋田に課す課題の問題を選択しながら手荷物おろしていたら、別の声が後ろから聞こえた。

「山本？」

振り返って、思わず苦笑する。

「あゝ。おはようさん」

「どうした？」

「どうしたって……」

橋田に見られたときより数倍恥ずかしい気がするの、野田が長い友人だからだろうか？

「まあ、諸事情ありまして」

この間のように曖昧に答えたあたしに野田は一瞬眉を寄せ、それから微笑した。

「……ずいぶんとまあ、変わったもんだな」

「あたしもまだ慣れんよ」

「ははは」

駐車場から職員室に向かう間並んで歩く。

生徒らはあたしと野田のツーショットなんて見慣れているはずなんだが、あたしの変身ぶりがよほどインパクトあるのかわざわざ振り返るやつもいて、ちよつとした騒ぎになった。

「えっ！ あれって」

「ホントに山本先生！？」

「うそおっ！」

「すごい、チョー美人！」

「やっぱ恋愛するとキレイになるんだね」

「マジ可愛い！」

……やかましい。

「ほら、おまえらもうチャイム鳴るぞ。教室行け」

しっしっ、と手を振って追い払う仕草をすると、そいつらは目をパチパチさせた後で一斉に顔をほころばせた。

「ああ、中身は変わってないんだ。よかった」

……………。

+

結局。

『中身は変わってない』というよく分からない反応のおかげであたしは一億ジンバブエドル損をした。えーと、1兆ジンバブエドル

が1ドルだったっけか。財布の中に残ってる小銭を眺めて適当に計算する。

それにしても『中身は変わってない』って安堵されるのも微妙だな。あいつとあたしが付き合ってたことのほうが衝撃的だったってことか。まあ、こんくらの化粧と格好なら研修出張でもやるからな。頭はおいといて。

職員連中も最初見たときこそ驚いてたが、意味深な笑みをひとつ浮かべただけで深く聞き出そうとはしなかったし、生徒たちも話したらいつもの通りで安心したようですぐに気にしなくなった。主任や教頭は触らぬナントカで完全スルーだ。そのうちあたしもこの格好がしっくり馴染んで、前からこんなだった気さえしてきた。早田君の腕が良かったんだな、うん。次は一人でも行ってみようか。

「お疲れさん」

職員室の自分の席に置いている貯金箱に小銭を投げ入れて、あたしは入ってきた櫛に声をかけた。

「あ、おつかれさまです」

櫛はすぐに視線をそらして自分の机に資料を置いた。

不思議なことに、あたしの変化に一番馴染んでないのはこいつらしい。

昨日帰るときも挙動不審だったな。

夜も食っていかと思ったら、アパートに着くなり早々に「明日も早いんで帰ります」と動揺した笑顔で帰っていった。別に寝たかったわけじゃないが（断じて）、拍子抜けしたあたしは少し面白くないものを感じながらもそれを見送った。

朝になりやマシになってるかと思や、放課後のこの時間まで極力避けてるのが丸分かりだ。

さすがに、腹もたってくる。

てめーがやったことを無視かい。

「お疲れさま」

体の左半分榊のほうに向けてピリピリと怒りのオーラ放ちながら事務仕事をこなしていたら、あたしと榊の間に野田が座った。

「ああ、お疲れさん」

「どうした？」

と、聞いてくる。

「おまえそれ今日二回目だ」

「聞かずにおられんだろ。まあ、なんとなく予想はできるが」

野田は薄く笑いながら榊のほうを見やった。

「そういえば榊は今週で実習終わるんだったな」

唐突に話しかけられて驚いたのか、榊はぴたりと動きを止めて振り向く。

不安定に重なっていた書類がバサバサ音を立てて崩れ落ちた。

「あ、すいませんっ」

……何やってんだか。

なんか怒るよりも心配になってくる。

「榊、お前大丈夫か？」

「えっ」

「調子悪いんだったら早く帰れよ」

あたしがそう言うのと、なぜか野田が振り返ってまじまじ見つめてきた。

すげー微妙な目で。

「なんだよ」

「いや、榊の調子悪いのはお前のせいだろう」

「ハア？」

「相変わらずだなあ。まあお前だから仕方ないか」

「おい、どういう意味——」

苦笑する野田のネクタイ引っ張って噛み付く。

が、あたしの威嚇なんて野田にとっては何処吹く風らしく、予想外のことを言い出した。

「榊、今日俺に付き合え」

「え？」

いきなり誘われてポカンとなってる榊にかまわず、野田は携帯電話取り出して「そうだな。七時予約しておくか」とかナントカ勝手に決めている。

「待て待て。野田お前何のつもりだ」

「男同士じゃなきゃ話せないこともあるからな」

「榊、付き合うことないぞ。こいつザルだからな。酔いつぶされんぞ」

「ご無礼な。学生相手に本気は出さないよ」

「いや出すだろ絶対」

「先輩としてアドバイスをするだけだよ」

「うそこけ。何のアドバイスだよ」

「ん？ 企業秘密」

「……」

この男っ！

+

八、ひとりの夜を

榊が拉致られた。

「ああ、もう。なんだってんだ」

溜まっていた雑用と、担当する委員会の仕事を片付けて学校を出たのは八時だった。

先週なら一緒だった榊はいない。

野田の奴が早々に仕事を終えて連れ出してしまった。二時間前に榊も榊で明らかに面白がるつもり野田にノコノコついてくことないのに、何を言われたか知らんが、あたしに聞こえないように囁かれた言葉にあっさり承諾してついに行ってしまったし。

「人の気も知らんで」

苛立ち紛れに乱暴に車のドアを閉める。

野田が榊を連れて行った店は知らないから乗り込むこともできない。つか、携帯出ないって何のつもりだ二人ともっ！

「ったく」

出張だった友紀に電話すりゃ、今夜はデートだって言うし。あたし一人かよ。

って。

「……………」

キーをまわす手をぴたりと止めて、ハンドルに寄りかかったあたしはため息をついた。

こめかみを押さえてそのまま髪をかきあげる。

「あほらし……」

こんなんでイラつくとか、餓鬼か。

おかしいな。

一人なんて慣れてたはずだ。
というか、一人だってだけでこんなむしゃくしゃしたことなんて、
今までない。

榊が野田と一緒にだからか？

榊が野田について行ったからか？

シートに沈み込むように力を抜いて座って、ぼんやりと手を見つめる。

馬鹿だろう。

榊は教育実習生で、学生で、あたしは指導教員だ。

榊の実習も今週で終わり。

あいつは大学に戻っていく。

大学で、同級とつるんで、遊んで、そうしたらあたしのことは飽きるだろう。

酔狂なんだから。

ちょっと、若気の至りだってだけだ。

自分もそうだったじゃないか。棚に上げて調子こくなよユウリ。
お前はあいつの指導教員なんだから。

「……やめよやめよ。馬鹿馬鹿しい」

独り言で強制的に頭切り替えて、あたしは車を発進させた。

月曜日の夜の、そう混んでいない県道をアパートのほうじゃなくて反対方向に走って、立体駐車場にとめて、携帯電話の電源を落とす。

この際だ。

久々に一人で飲もう。

十

週の初めの夜に深酒をする社会人は少なく、行った先の居酒屋は大学生でにぎわっていた。

自分が前の格好じゃなくて、女医コスもどきだったのをすっかり忘れていたあたしは、入った瞬間すごいアウェーな居心地を感じて立ち止まった。

（店変えよう）

いかなあ。

無意識にこっちに足が行っちゃった。

「あれ？ 山本さん」

店の奥の騒がしい一団からひょっこり出てきた男が、立ち尽くすあたしと目があって笑った。

「ああ、昨日はどうも」

「いえいえ」

だいぶ酒が入ってるらしい早田君は赤い顔で近づいてきた。
他の客に道をあけてあたしたちは立ち話をする。

「ヒカルと一緒にですか？」

「いや一人。あいつ今日別の教師に連れてかれて」

「じゃあ一人で飲みに？」

「そうだけど、店変えようかと。早田君は？」

「オレは同級に付き合わされて。三時からですよ」

「ははは。若いと体力あっていいね」

「山本さんお一人なら一緒に飲みませんか？ ヒカルの彼女だって
紹介しますから」

早田君はまったく悪意なくそう言ってくれたけど、あたしは笑った
口元をひきつらせた。

「ご遠慮します」

「大丈夫ですって。今日素敵ですよ山本さん。その髪型似合ってますよ。さすがオレ」

客の前で自賛したよこの人。

「早田君だいぶ酔っぱらってるでしょう？　なにかするのに席を立つたんじゃないの？」

「あ、トイレに」

「じゃあ行っておいでよ。また今度お店に行きますよ。けっこう気に入ったからこの頭」

「ホントに？　やったー。嬉しいな」

酔っ払っただらしなない笑顔で早田君はあたしの髪の毛を触った。

「じゃあ次は気合い入れてもっとキレイにしますから」

おいおい。言うことはおかしくないが、目がイってるぞ早田君。

「なおきー。なにしてんのおー？」

宴から出てきたもう一人の若い子が、早田君とあたしを見て眉間にシワを寄せた。

「みお」と、早田君が一瞬正気に返る。

「んもうー。またお客さん口説いてるの？　いい加減にしなさいよねアンタ」

早田君を怒りながらも視線はばっちりこっちを睨んでるその可愛

い女の子は、あたしと彼の関係を思いっきり勘違いしてくれてるらしい。

ああ。は。

なるほどね。

榊といい、早田君といい、モテますことですねえ。

「ちげーよ。この人――」

うろたえた早田君はとんでもないことを口走ろうとしたので、察したあたしはすばやくその脛を蹴った。

「いっ！」

涙目で脛押さえる早田君を無視して、あたしは彼女に微笑みかける。

「偶然会ったものだから、次のカットの相談をしてたんですよ。じやあ私はこれで。失礼」

「ちょ、山本さん――」

まだ引っ張るつもりかこの餓鬼。

「なにか？」

生徒らにするのと同じ”夜叉スマイル”で睨んでやる。

「――……いや何もないす。お仕事お疲れさまでした。また今度」

「はい。また今度」

早田君の青ざめた顔に会釈をして、あたしは居酒屋を出た。

あー、危ないところだった。

あの文脈だと確実に「ヒカルの彼女」というワードが出てたに違いない。

同級生と一緒に言ってたし、ということはあの彼女も榊の同級に間違いない。

よかったよかった。

しかし、こんなピンポイントで知人に会うとは。

いっそ完全に一人で飲もうと思ったのに誤算だ。こりゃ、店選ばないと、榊たちとはち合う可能性もあるな。

しかたない。

野田の知らん店に行くか。

十

八、ひとりの夜を（後書き）

今回夕利ひとりだったのに何故君は出て来るのだね早田君。

九、再会

「夕莉……?」

カウンターの隅で水割りを傾けて気持ち良くなってたところに落とされたのは声の爆弾だった。

うそだろ。

あたしは言葉もなくして、ただその声の持ち主を凝視する。

「ああ、やっぱり夕莉だったか。久しぶりだな」

相変わらずシワひとつないきっちりした三つ揃いのスーツ。

オールバックで整えられた髪の毛。

柔らかに笑う目と、形の良い唇。

あたしの――。

「ご無沙汰しています。
日高^{ひだか}先生」

あたしの、前の男。

+

「驚いた。綺麗になったな」

「そう言っただけは自分のグラスを傾ける。」

くそう。まさかラスボスに遭遇するとは思わなかった。

野田の知らない店と思って、わざわざ通りからちよつと離れた小さい店に入っただけというのに、もう運が悪いと思えない。
あたし今日なんか憑いてんのかな？

「びっくりした。よく似合うじゃないか」

昔と変わらない目で見つめてくる相手に、あたしは曖昧に笑う。

「ありがとうございます」

橋田あたりが聞いたら『中身がちげえ！』と驚愕するだろう丁寧さで礼を言くと、日高先生は眉を寄せて苦笑した。

「敬語は止めてくれ夕莉」

「そういうわけには」

「二人でいるときはそう決めただろう？」

「昔の話です」

「……」

あたしが顔色ひとつ変えずにそう言ったからか、微妙な沈黙が流れた。

「夕莉、まだ怒ってるか？」

思いがけず聞かれて、振り向く。

泣きそうな寂しそうな目があたしを見ていた。

「まさか」

「そうか」

「というか、怒るものにもないじゃないですか」

ホッと息をついて安心したようなそぶりを見せた日高先生は、続けたあたしの言葉に顔を曇らせる。

「え？」

「わかってますよ。セフレだったことくらい。私もそのつもりでしたし、それで日高先生が負い目を感じることはないですよ。ただ、筋が通らないと思っただけで」

日高先生と初めて出会ったのは、奇しくも教育実習生の時だ。

彼はあたしの指導教員で、公立高校で化学を教えていた。

授業のやり方も進め方も課題の組み方も、全部教わった。

他のことも。

「しかし珍しいですね、日高先生がこちらにいらっしやるなんて」

雑音ノイズのように脳裏の片隅で再生された記憶を無視して、あたしは話題を変える。

「こっちに出張でしたか？」

二年前、あたしとの関係が終わらせた直後くらいに突然他県へ引越していった以来、県内で日高先生を見ることはついぞなかったことだ。

こっちが職員研修で県外出張だったときにばったり顔を合わせることはあっても。

「いや、うん。出張と言えば出張なんだけど。今度、戻ってくることになって」

へ？

「こっちの高校に、ですか？」

「そう」

「そう、って。なんでまた。奥さん反対されたんじゃないんですか？」

「いないよ」

「え？」

「結婚しなかったんだ。結局。ああ、君のせいとかじゃなくて。向こうに新しい人が出来たものだから。はは。情けない話だね」

「……」

そうですね、と言えない雰囲気だな。おい。
なんだよ、別れたのか。

たしか婚約もしてたんじゃないかなかったっけ？

「俺と別れて向こうでさっさと結婚してしまったよ。その相手が同業者でね。さすがに県内だと辛いものがあるから、逃げ帰ってくるというわけさ」

日高先生は自嘲してグラスをあおった。

「今日は、教育委員会に顔を出してきた。公立で教えたいのは山々だけど、それが無理なら私学に勤めるつもりだ。また一緒になるかもしれないな」

「そうですか」

日高先生と一緒に……。

あたしの中じゃとくに清算した相手だから、別に同じ職場になっても気持ち揺らぐことはないだろうけれど、めんどくさそうだな。

「席は空いてるかな？」

「さあ」

無関心に返事をして自分のグラスを空にする。

「うちだったらすでに埋まってますよ。化学担当は」

「いや、そうじゃなくて、君の隣」

は？

「驚いた。本当にキレイになったね。フラれて凹んでいたけど、夕莉を見たらどこかに行ってしまったよ」

左手がスッと伸びてきて、あたしに触れようとする。

――のを。

「ダメですよ」

あたしは右手で制した。

「俺もうフリーだよ？」

そう言う日高先生の目は、明らかに何か間違った期待をしていた。

二股かけてたから怒ったんじゃないって、分かってんじゃない。

そうだよ。

向こうも単なるセフレだったんなら、別にあたしはかまわなかったんだ。

そうじゃなくて、婚約者にまでなるような相手がいたからだ。

あたしにも相手にも失礼なそんな態度を知って、あたしは彼との関係を切った。

二年前は、そうだった。

でも今は。

「日高先生はフリーでも、私がフリーじゃないので」

そう答えると本気で驚いた目があたしを見た。

何気に失礼だな、この男。

「夕莉の言う、セフレじゃなくて？」

「はい」

「……」

その言葉をどう受け取ったのか、あたしに伸ばされていた左手はスルスルと戻っていく。

「そうか……それはまた、残念だな」

と、彼は右手を口元に持っていて、何か考えてる、いや、企んでる顔でつぶやいた。

+

九、再会（後書き）

本命、いや黒幕さん登場です。
夕莉逃げて！。

ここまでお読みくださりありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4135m/>

私を彼女と呼ばないで

2011年5月12日09時18分発行